

炎が流行して一命を落とす者が出だした。これらはやむなく茫漠の野に葬られたが、ただ毛布にくるんで運び、細長く掘った穴に埋めて土をかけておくだけであった。手折って供える野花もなく、線香のかわりに紙切れで手巻きしたマホルカ（刻みたばこ）の煙が、寒い北風にくすぶっているだけであった。

## 悲愁のラーゲル

岡山県 埴和恵三

### 概要

この記録は、在ソ生活は私の生涯の歴史の一頁になるものと思ひ、入ソ時から要点を記録していた日記簿を、帰国の折ソ連側に没収されたので、帰国（昭和二十四年八月）後直ちに忘れぬ間にと記憶をたどりながら約四か月を費やして書いたものであり、その抜すいを、出発時から目的地到着時までと、目的地到着時から昭和二十年十二月末時までに分け書いて提出しま

す。なお、手許にはその後、昭和二十四年八月四日舞鶴港上陸まで続いておりますが、何分文才のない素人の記録で人様の前に出せるようなものではありません。

### 私の記録

昭和二十年十月二十日午後三時ごろ牡丹江駅を発車した輸送列車は翌二十一日に綏芬河駅に到着した。ソ連側の命により編成した一列車千人一個大隊の組織は次のとおりであった。

第一一八輸送大隊（ソ連側の指示）

大隊長 陸軍大尉吉井よ造

（ ）内出身部隊

經理小隊（長） 南野准尉（十一飛大）

第一中隊（長） 田中中尉（十飛大）

第二中隊（長） 井原中尉（十一飛大）

第三中隊（長） 神長中尉（十一飛大）

第四中隊（長） 吉永中尉（二航通）

ソ連側は戦争は終了したので内地（日本）へ送還す

る編成だと言明し、我々も帰国するものと確信していたので、これがソ領に送られるとは夢にも思っていなかった。

### 第二中隊第二小隊の編成

第一小隊長 岡本曹長	第二分隊長 井和軍曹(約二十人)
第二中隊長 井原中尉	第二分隊長 笠原軍曹
第二小隊長 守屋曹長	第三分隊長 塩倉伍長
第三小隊長 安藤曹長	第四分隊長 村上伍長

### 昭和二十年

十月三十一日、貨車は二段ベットで四十人詰め込まれ真ん中に粗末なストープが一個あった。

車両長は守屋曹長で、車内では牡丹江駅で拾い集めた大豆を飯盒のふたで焼いて、ほりはり食べていた。外は一面の荒野で行けども行けども果てしない。

十月二十二日、大きな河を渡ったころ下車準備の命令あり、皆ウラジオストクに到着するのだとあわてる。しばらくして今の命令は取消しになった。どうもおかし。

十月二十三日、何やら汽車は西を指して走っている

らしい。太陽のぐあい判断しようとして見るが、山間をぐるぐる回るようにして走るので見当がつかない。すっかり満州と風景が変わった。建物は木造の頑丈なものばかりだ。

十月二十四日、輪指揮官はソ軍大尉・警備司令上級中尉。警戒兵(カンボーイ)約二十人で停車することに警戒兵が下車して巡警護する。

汽車が西に向かって走っているのに、みなそろそろ感づき顔色の変わった者もいる。一体どこへ行くのだろうか。停車した駅でロシアの民間人にわらをつかむ気持ちでウラジオストクはこちらの方かと、進行方向を指すと、そうだと云った。念のためにモスクワはこちらの方かと後方を指すと、そのとおりだと答える。それではやっぱりウラジオへ向かって走っているのかとも思う。

十月二十五日、相変わらず汽車は走り続ける、こうなるとあまり走るのは反対に不安になり、不気味になりだした。

十月二十八日、いよいよシベリアで重労働に従事す

るらしいとのうわさが飛ぶ。それでも皆帰国の希望は捨てていなかった。

ある停車場でシラミの検査を受ける。こんなことは生まれて初めてだ。

駅々で物々交換が始まる。ソ連の子供や老人たちが牛乳やピロシキ、黒パン等を持って来て我々の持っていた石けん・糸・布・帯革等と交換した。皆空腹のため、内地に帰りさえすればこんなものは要らないと盛んに交換した。それを警戒兵が見つけて叱るけれどもやめられない。

十月二十七日、海のようなバイカル湖が見える。世界最大の湖だ。皆の話の中に「地中海の方に出て乗船する」というとんでもない話がまことしやかに出た。

十月二十八日、夜中にイルクーツクに着く。今までにない大きな町らしく、数多く輝いている電灯のさらに上空を電車が走る音がしていた。

兵站給与でエンドウ豆の煮た食事が出た。大変うまかった。

まだ走り続けている。ままよ、もうどうにでもなれ

という気持ち全員に起こる。もう絶対にウラジオには着かないという確信ができたが、一体どこへ連れて行かれるのだろうか。

十月二十九日、昼は長く停車して夜ものすごく走るので、よけい方角がわからない。

十月三十日、ある駅で帯革と黒パン半分と交換した。次の駅で包帯包みの中にある昇永ガーゼと少女が持ってきた馬鈴薯の油焼きと交換した。

車中では相変わらず大豆を焼いて食べ、水を飲んでいる。下痢患者発生する。

貨車はぼろぼろで隙間風が入り、もう相当寒い。ストーブをどんだんかねば寝つかれない。

十月三十一日、どうやら目的地に近いという。炭坑へ行く話も出る。

だれか、ロシアでは体重に比例して労働の量が違うのだと言う者あり。

十一月一日、タイシエツト駅に到着し下車する。一面雪だった。

以上入ソ時からシベリア鉄道目的地まで

十一月二日、朝目的地（キビトーク）に着く。思えば十三日間にわたる長い列車の旅であった。

今まで我々に対しては努めて紳士的であった警戒兵（カンボーイ）の態度が一変して、我々の所持品に目をつけ始めた。ここで我々日本兵と別れるので今まで押えていた欲望が一度に噴き出したのだろう。だれかは時計を強奪されたという。だれかは時計一個と米一俵（実は当方の糧秣）と交換したという。

吉井大隊長より今日は明治節（一日違っていたが）でもあるので、非常用として各人携行している米を一食分食べてよいとの許可が出た。早速飯盒で炊いて、とっておきの缶詰を切り皆で食べた。

人員点検、服装所持品検査、糧秣おろし等をすまし、夕方近くになって出発し、ここより行軍で収容所に向かう。山また山を越え約一里歩いて収容所（第七収容所）に到着した。

周囲を板塀で囲んだとてつもない大きな囚人用の収容所であった。その中の第二バラックに入った。もちろん、電灯、便所なしの古い木造である。

十一月三日、今日から収容所生活が始まる。毎日使役として約半数の人員がまき取り、糧秣受領、清掃作業に出役する。

山の中にある収容所で、大きな松の木、シラカバの木にシベリア嵐が毎日吹きつけている。非常に曇が低い、手に取れそうだ。

十一月四日、車中で重体だった某初年兵病死す。初めての犠牲者を出す。夜中にもかかわらず収容所長とソ側軍医がかけつけた。

十一月十二日、我が中隊の長安一等兵死亡する。原因は心臓衰弱とか。彼は召集兵で鳥根県出身、小学校卒業の後北海道に渡り料理の修行をし店を構えていたとかで、まじめで料理が上手であった。そのため以前は官舎当番を長くやっていた。輸送中大豆がたたつて下痢をしていたが、彼が一番内地に帰りたいがっていた。

十一月十三日、急に肛門がはれて痛みだした。一夜中一睡もできずうなっていた。

十一月十四日、翌日医務室で森重軍医中尉（京城医専出身と聞く）に切開手術を受けた。このときくらい

痛かったことは生まれて初めてだ。これより以降寝たきりの生活が収容所内のバラック建物の中で続く。

十一月十五日、中隊長から当番一人（西野上等兵）をつけていただく。岡山県出身の召集兵で大変お世話になった。歩行できないので、大小便ともにとつてもらう。

室の中は木製の二段ベットで窓は高く小さく、昼でも暗くランプもないので、必要の都度シラカバの皮を取って来て灯火用に使っていた。ここでも水に不自由して雪を解かして使用していた。

十一月二十日、毎日の包帯交換は中隊の渋江衛生兵長が来てやってくれた。

毎日の作業に木材の貨車積み込みが開始されたという。三中隊の兵が首つり自殺をしたニュースが入った。毎日の食事は朝は二人で飯盒の一杯のコウリヤンのかゆで、とても食えたものではないが、空腹に詰め込む。このコウリヤンも真つ赤でしぶくてまずい。昼は黒パン（これもコウリヤン製）三百グラムくらい。

一時、十二月末にも帰国できる話も出た。

我が一八輸送大隊は入ソするとはだれも考えていなかったため、毛布は一枚も持参しなかった。皆そのまま荒削りの板の寝台に寝るはめとなる。

このごろ後続の一二四大隊が入って来た。大隊長は浅野中尉。

収容所長はソホフスキー大尉といい、通信隊出身で、独ソ戦で独軍の捕虜となり右の人指し指を切断されていたのでいつも手袋をはめていた。非常に冷厳な人で一度も笑ったことがなく、日本人はみな毛虫のようにさらっていた。副官はチエボル中尉でござかしい男であった。

我々を管理監督するソ連側は、警備の任に当たる軍人を別にして、その他の者すなわち収容所長、作業監督、作業主任、各施設の責任者等はすべて独ソ戦において独軍の捕虜になったソ連軍人が、罪に服しシベリアに送られ、そのうち服役中の成績のよい者がなっていた。そのため彼らは捕虜の経験者で作業の手抜き仕事や生活の裏表をよく知っており、我々としてはまことにやりにくい面が多かった。

病人以外は何らかの使役に服した。

十二月一日、十二月に入つてやつと人の肩につかま  
つて毎日医務室へ治療を受けに行く。

正月用にと米や缶詰等を炊事場にストックしている  
のがソ連側にバレて問題となり、一遍に全部各人に配  
給して、正月まで各自保管することになる。話しても  
わからぬことが多い。

通訳はソ連側には未だおらず、もっぱら日本側の通  
訳が担当していた。日本側の通訳はみな優秀で、関東  
軍で教育を受けた下士官、兵が主力だった。皆スパイ  
の摘発を恐れて氏名を変えていた。

夜が長くて眠れない。午後四時ころから朝九時ころ  
まで真つ暗だ。灯火がないのでみな暗やみの中で話を  
している。腹が空いて困る。糧秣運搬作業に行く者は  
物入れ（ボケット）やスボンに糧秣を盗んでくる。

毎日舎内外の清掃検査がある。非常に厳しい。

糧秣がますます悪くなる。満州から運び込んだ軍の  
糧秣は底をついたらしい。このころから大豆ばかりだ。  
野菜はワカメに乾燥ワラビ等だった。年の暮れころに

は丸粒のトウモロコシだけになった。これがスーブの  
中に少々あるのが主食だ。

零下三十度近くになると、作業は休みだった。

医務室は設けられてあつたが入室や入院設備は未だ  
ないので、怪我負傷者や病人は各兵舎で治療させてい  
た。

なれぬ気候、作業のため怪我人が多い。気候、環境  
の激変のため特に初年兵、召集兵等の体力、精神力の  
充実していない者の患者が多く発生し、死亡する者が  
多い。

十二月三十一日、本日も平日どおり全員作業に出る。  
虜囚の悲哀を実感する。

昭和二十年の項終わり

## 生地獄のシベリア強制労働

大阪府 近藤 恒雄

国境の町、満州里を失望と不安を満載した列車がシ